

日本よりひと足早く、世界各地ではすでに今シーズンが開幕している。来シーズンはいよいよバンクーバー・オリンピックを迎える。世界のレースシーズンではオリンピックを契機とした朝いが徐々に本格化してくる。日本チームや国内レースシーンでもそれは同様、ワールドカップを担う男子トップチームは北欧フィンランドで開幕戦をこなしている。彼らにとっては、ワールドカップでの結果を求めながらも、オリンピックに向け本来の任務で備わったという開幕のシーズンとなる。だが同時に、朝もなく雪を降りる国内のシーズンでも、数少ないオリンピック代表の機会をかけた朝い朝いが繰り返される。そんな今シーズンの男女の国内レースシーンを展望してみよう。

シーズン
開幕直前
PREVIEW

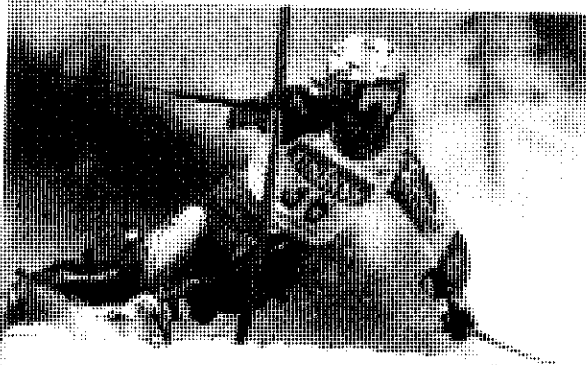
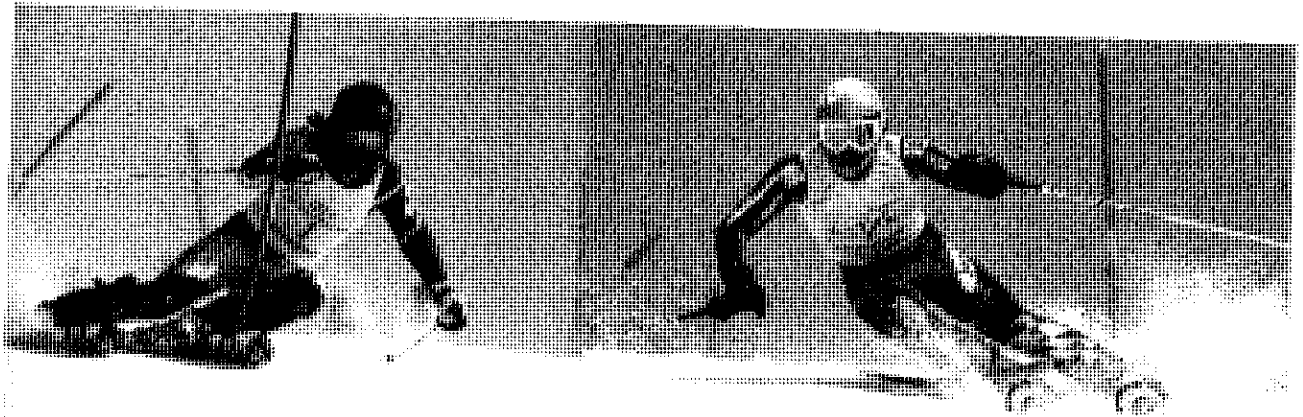
バンクーバーに向けた

勝負の

シーズン

08/09シーズン国内レース場





Men's

男子

石井智也がケガでシーズン中の復帰絶望。残りの五輪枠を争う激しい戦い

男子はトップチームの3人が、すでに北欧フィンランドでワールドカップ開幕を迎えている。今シーズンに臨むにあたって、それぞれに課題は異なる。佐々木明(所属未定)は第1シードに早い段階で復帰し、トップレベルの争いに加わる。湯浅直樹(スポーツアルペンスキークラブ)は第2シード

右上 シーズン開幕直前、膝の靭帯損傷によって、早くも戦線から離脱してしまった石井智也。大きな期待と注目を集めていた存在だけに残念だが、しっかりと治しながらも、できる限り早い時期での復帰をめざしてほしい
 左上 今シーズンからシニアチームに昇格した大越龍之介。ファーストカップ種目別タイトルのアドバンテージを活かして、ヨーロッパで積極的なレースを繰り広げてほしい
 左下 ジュニアチーム所属の布施隆は高校3年生。最後のインターハイを控えるが、海外での経験の積み重ねも重要になる

ドへ復帰しチャンスがあれば上位をねらえる位置につけること、そして皆川賢太郎(チームアルビレックス新潟)はランキングを上げながらシードへ返り咲くことがさしあたっての今シーズンの目標となるだろう。そんな3人はケガや極度の不振など、よほどのことがない限りワールドカップを主戦場に

め、ワールドカップへの出場権やヨーロッパカップでのシード権を持つ。ヨーロッパカップに拠点を置いて戦い、チャンスがあればワールドカップにも出場することになるはずだ。現時点では、オリンピック出場枠の最有力候補と言える。

戦い、残り2シーズン弱をオリンピックを万全の体制で迎えるための準備に費やすことになる。オリンピック出場枠は1種目につき1カ国4名まで。そう考えるとほかの選手にとっては、オリンピックへの道は非常に狭き門となる。GSは世界との差が大きく、出場権を得ることが厳しい種目。スラロームに限っても、今の段階では残りひとつの椅子を、ナショナルチーム組と国内組を含めた、多くの選手で争うことになる。

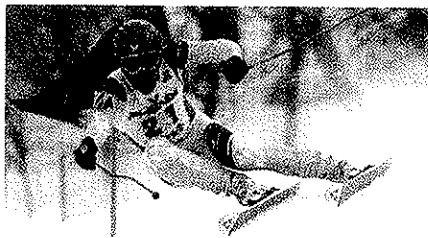
そんななかで、トップチームの3人にもっとも近い位置にいるのが大越龍之介(北海道東海大学)だろう。今シーズンから順調にシニアチームに昇格。昨シーズン、ファーストカップのスラローム種目別タイトルを獲得した

そんななかで、トップチームの3人にもっとも近い位置にいるのが大越龍之介(北海道東海大学)だろう。今シーズンから順調にシニアチームに昇格。昨シーズン、ファーストカップのスラローム種目別タイトルを獲得した

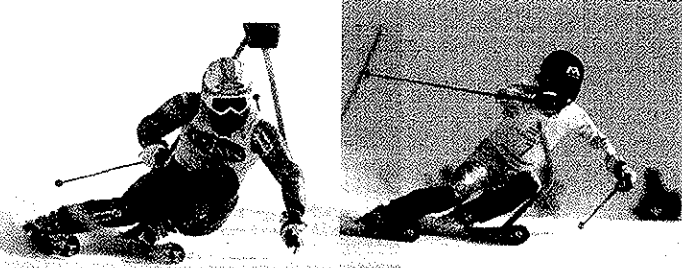
そのほかの全日本ジュニアチームのメンバーも、虎視眈々と世界の大舞

2008/2009 Japan Alpine Ski Team

男子	ランク	氏名	生年月日	所属	加盟団体
	A	佐々木明	1981/09/26	ビージェイエムスキークラブ	東京都
	A	湯浅直樹	1983/04/24	スポーツアルペン・スキークラブ	愛知県
	A	皆川賢太郎	1977/05/17	チームアルビレックス新潟	新潟県
	C	大越駿之介	1988/11/29	北海道東海大学スキー部	学連
	Jr-A	石井智也	1989/05/23	北海道東海大学スキー部	学連
	Jr-A	及川貴寛	1989/03/28	中央大学学友会体育連盟	学連
	Jr-A	布施 峰	1990/04/10	關志学園JWSC	新潟県
	Jr-B	河野泰介	1991/10/02	飯山北高校	長野県
	Jr-B	高澤 伸	1989/02/16	専修大学体育会スキー部	学連
	Jr-B	清水 大	1990/02/24	中央大学学友会体育連盟	学連



ケガや病気を乗り越えて選手活動を続ける渡辺靖彦。豊富な経験を武器に安定した成績を残している



単身ヨーロッパに拠点を置いて戦う片桐健策。どちらかというGSで好成績を取めているが、スラロームでも虎視眈々と上位進出をうかがう

昨シーズン、わずかの差でファーストカップのタイトルを逃してしまった武田竜。今シーズン、もう一度そのチャンスを手にすることができるか



花田将司は06/07シーズンに数戦ワールドカップにも出場したが、結果を残せなかった。もう一度その場に立つことをめざして戦う

台をねらっている。2010年のオリンピックに限らず、その後のワールドカップやオリンピックが、彼らのメインターゲットになるだろう。けっして焦る必要はないが、世界のレベルと層の厚さを考えれば、ゆっくりしている時間もない。トップチームの3人を目標にして、果敢に世界に挑んでいってほしい。

そんなナショナルチーム以上に、今シーズンが重要になるのが国内組の選手たちだ。2010年のオリンピックに出場するには、最低でも今シーズン終了時点でナショナルチームに選抜されていなければいけない。すでにトップチームがオリンピックに向けたチーム体制を整え始めていることを考えれば、すでに状況は厳しいものがあるが、それでも今シーズンが最後のチャンスとなる。ここで他の選手を圧倒するような、あるいは世界で通用すると思わせるような活躍を見せることで、オリンピックへの最後の扉が開かれるかもしれない。そんなラストチャンスに賭けて、国内組の選手たちは今シーズンに臨んでほしい。

昨日タイトルを激しく争った武田竜(サンミリオンの福岡S.C)や、同シリーズで好調をキープした佐藤翔(日本大学)や奥田佑輔(中央大学)、ナショナルチーム復帰をめざす花田将司(北海道東海大学)といった選手たちのモチベーションは高いだろう。さらにはケガを乗り越えた経験を武器に戦う渡辺靖彦(所属未定)や水尾大輔(サンミリオンの福岡S.C)といったベテランと言え選手たちも、選手生活の集大成をかけてシーズンに臨む。

そうした国内組とナショナルチーム組の立場は若干異なるものの、オリンピックに向けたラストチャンスに賭ける思いは誰もが強く持っている。その思いがぶつかり合うことで、より熱い争いが見られることを期待したい。

なお、GSについては厳しい現実がある。片桐健策(ICSスキークラブ)や本田浩樹(サンミリオンの福岡S.C)などGSを得意とする選手はいるが、オリンピックの代表選考もJOC(日本オリンピック委員会)によって厳しく制限される状況では、GSだけのオリンピック出場はむずかしいと言わざるを得ない。だが、最後まであきらめずに、戦い抜く姿を見せてほしい。